ドキュメンタリー番組：「コウノトリはどこへ」を見て

「雑学ＢＮ」の「ＴＶ番組等紹介欄」で案内していたので、TV 番組：「コウノトリはどこへ」をご覧になった方もいると思う。
５月に開設された「赤ちゃんポスト・こうのとりのゆりかご」の背景問題に迫る番組であった（８月までに６人の赤ちゃんがポストへ。内一人が親元へ戻る）。

「赤ちゃんポスト」設置の病院の理事長であり、今まで３万人の赤ちゃんを取り上げ、宗教上の理由から中絶したことのない産婦人科医は、「赤ちゃんポスト」はあくまで最後の手段という。
また、予期せぬ妊娠に悩む女性に２４時間体制で電話相談に応じるこの病院の看護部長は、相談だけでは助けられない命のあることを知ったという。

番組は最後に、「子どもは、最初は赤ちゃんポストに入れられる時、２度目は２歳になって乳児院を出る時に好きになった先生（保育士）との別れと、２度母親との絆を断たれる」という。
確かに、番組の中でも、信頼し甘えられる先生の帰宅に、「もう帰るの？」と後追い、すがり泣く姿には心が痛む。
保育士は、「信頼している人と別れさせられる子どもの気持ちを思うと、辛いですよね～。」と云う。

また、２５年前に遺棄され里親に育てられた女性は、結婚した夫から「遺棄した母を恨むのは仕方ないが、生んでくれたことは忘れるなよ！」と論されても、頭で解っても感情が伴わないと今も苦悩する心境を語っている。

救えた命の後々の心のケアの支援も、「赤ちゃんポスト」設置問題と平行して取り組まれることを切に願う。

こうした番組に接すると、２０歳未満の人工中絶件数・年間約３万件（cf.年間自殺者数約３万人が社会問題化なのに、なぜこの数字は社会問題化しないの？）、また、出産の内２５％ができちゃった婚で、１８歳以下の出産では８０％というデータを思い出す。
結婚→妊娠→出産というステップが崩れ、未成年者の親になることへの心の準備過程が乏しい内に妊娠する現状を知ると、根本的な社会的背景・要因の検証、対策がどうしても必要な気がする。

自分は授業で横道に逸れて若者たちに、
「愛するとはどういうことかは誰も教えられない、愛されてこそ学ぶもの。
但し、デートで SEX することが愛の証と錯覚するなよ！
愛とは、お互いを人として高め合う係わり合いのプロセスにあることを忘れるなよ！」
と、お節介にも話しているのだが……。

阿部幸泰　　（2007 年 8 月 28 日　記）